

〈資料紹介〉同志社大学所蔵 源氏物語絵の紹介

岩 坪 健

近年、本学の所蔵になった三件の源氏物語絵について紹介する。
いずれも彩色画付きの完本である。

一、源氏物語絵巻 一卷

箱の蓋に「源氏之繪 詞書在 土佐光信筆」と墨書されているが、極め書きなどはない。光信は土佐派中興の祖とされ、一五世紀から一六世紀にかけて活躍した。一方、詞書は江戸前期写と推定される。卷子本一卷で表紙は緞子、見返しは金銀箔・野毛散らし、詞書は天青地紫の内曇りの料紙、絵は淡彩色画で天地に金泥霞、紙背は金銀砂子散らし。詞書も絵も五枚ずつある。表紙の寸法は縦三四・四、横二七・二センチ、料紙の横のサイズは詞書も絵も四八センチ前後である。

五図とも名場面が選ばれているが、描き方に特徴が見られる。第

一図（紅葉賀の巻）は光源氏と頭中将が青海波を舞う件で、その舞では袍の右肩を脱ぐと決められているが、本図では脱いでいない。
第二図（乙女の巻）は五節の舞姫が舞う場面で、その場所は宮中の殿内であるはずだが、本図では庭に降りる階^{きざし}を背景に地上で五人が舞っている。第三図（常夏の巻）は涼んでいる光源氏たちに魚を調達している箇所であり、その場所は「東の釣殿」と詞書にも記されている。絵も床が水流の上に張り出してはいるが、格子がすぐ横にあるので釣殿ではない。第四図（若菜上の巻）は蹴鞠をしているとき猫が飛び出したところで、物語には「から猫のいとちいさくおかしげなる」^①と書かれているが、本図の猫は大きくて縞模様があり、まるで虎のように見える。最後の第五図（橋姫の巻）は薫が、琴・琵琶を合奏する姉妹を垣間見る条であるが、琵琶を弾く女君しか描かれていない。また物語には「すいがいの戸をすこしをしあけて」

〔湖月抄〕薫は見たとあるので、薫は地面に立っている。しかし本図では簀子に上がり扇を左手に持ち、両手を肩のあたりまで上げている。^②このように源氏物語絵の決まり事に外れる箇所が見えるので、源氏絵をお家芸にした土佐家の当主、土佐光信の筆ではなからうが、画風などから土佐派の流れを汲むと推定される。

本作品のように源氏物語から教場面を選んで絵巻に仕立てた作品は支子文庫（九州大学付属図書館蔵）にもあり、四季と賀・祝の六図から成る。本作の各図の時季を第一図から示すと、十月・十一月・六月・三月・秋の末であり季節の順ではなく、これは巻の順によると考えられる。

詞書の本文について調べると、常夏の巻以外は青表紙本系統^③と見なせる。問題の箇所を翻刻して、次に漢字を当てたり濁点を付けたりなどした本文を（ ）内に記す。

にしかはよりたてまつれるあゆ御まへにててうしちかき河のいしふしなとやうのものせうようし給

（西川よりたてまつれる鮎、御前にて調じ、近き川のいしふしなどやうの物、逍遙し給ふ）

〔西川よりたてまつれる鮎〕の箇所は大きな異同がないので、「鮎」以下の本文に読点を付けて系統別に列挙する。

○青表紙本（『源氏物語大成 校異篇』の底本）

（資料紹介）同志社大学所蔵 源氏物語絵の紹介

あゆ、ちかきかはのいしふしやうのもの、おまゑにて、うして
まいらす

○河内本（尾州家本の影印による）

あゆ、おまへにて、うし、ちかきかはのいしふし^{なと}やうのせう
ようし給にて

両系統では本文が異なり、青表紙本には「逍遙^{せうよう}」（楽しむという意味）という言葉がなく、本絵巻は河内本の本文「などやうの」の続きに「もの」を付け足している。二系統に分類されない別本でも、「物」と「逍遙」を併せ持つ写本は保坂本しかない。

○保坂本（影印による）

あゆ、いしふしなとやうの物、御まへにててうしてまいらす、
せうようしたまふに

しかしながら保坂本は青表紙本から「近き川の」を削り、代わりに「逍遙したまふ」を追加したような本文であるので、本絵巻は保坂本より河内本に近い。室町時代になると和歌の世界では藤原定家が崇拜されるようになり、それにもない源氏物語も定家が校訂した青表紙本が優勢になり、江戸時代になると河内本は国学者でさえ実見したことのない幻の伝本になる。^④けれども本作品により、源氏絵の詞書に河内本の本文が残存していることが確認され、その意味でも貴重な資料である。

二、源氏物語画帖 一帖

折帖装で、表紙の中央に貼られた題簽に「古土佐源氏五拾四状画賛」と墨書されている。布表紙は萌黄地に牡丹唐草金襴、寸法は縦が三〇・八、横が一四・八センチである。五四帖から一場面ずつ選ばれ、詞書も絵も各五四枚揃った完本。各面に詞書と絵の色紙が一枚ずつ上下に貼られ、第二七帖（篝火の巻）までは絵が上、第二八帖（行幸の巻）以後は逆に絵が下になっている。各面には巻名を記した付箋が付いていて、東屋の巻のみないが、これは剥がれたのであろう。巻の順を調べると、たとえば源氏物語の梗概書で近世にも版を重ねた『源氏小鏡』は関屋の次に蓬生、竹河の次に紅梅が続くが、『湖月抄』はそれぞれ逆であり、本画帖は『湖月抄』と同じ順序である。色紙の大きさは詞書も同じで、縦一四・〇、横一二・六センチ。絵は金泥彩色画で上等な顔料が使われ、天地に金箔霞。詞書の料紙はすべて無地の薄い紅殻色で、書風は江戸時代中期と推定される。

絵に関しては古来、描き継がれてきた場面が多い。次に取り上げる八図も、その巻を代表する場面ではあるが、本作品には肝心なモチーフが抜けている。それらを巻の順に列挙すると、使者が持つ箱の中の紅葉（少女の巻）、琴（篝火の巻）、夕霧が手に持つ藤袴（藤

袴の巻）、柏木が持つ藤の花（藤裏葉）、猫（若菜上）、手紙（幻）、琴（橋姫）、手習いの机（手習）である。それらのうち藤袴と藤、そして机は巻名にも関わる重要な小道具である。また、紅葉がないと贈り物にならないし、猫がいないと垣間見は起きない。篝火の巻で物語には源氏と玉鬘は琴を枕にしてと書かれているが、絵では琴がないため寝ているのか起きているのか判然としない。幻の巻では焼き捨てる手紙が描かれていないので、囲炉裏に両手を広げた女房達は、まるで手をかざして暖まっているかのように見える。橋姫の巻で琴を省略して琵琶だけ描くのは、前掲の源氏物語絵巻と共通するので、こういう描き方もあったのだろうか。たとえば白描源氏物語团扇貼付屏風（高津古文化会館蔵。後掲の『源氏絵集成』所収）でも琴は見られないが、琵琶を弾く女君は簾を高く上げているので露わに見え、その隣にいる女君は簾を下まで下ろしている。本来は簾越しに琴も描かれていたが、やがて琴、そして琴を弾く女君も消えてしまったのかもしれない。

このように画竜点睛を欠く絵のほか、場面が特定できない図もある。たとえば賢木の巻の詞書は、光源氏が野宮で榊の葉を差し出す名場面であり、室内にいる男性は源氏だけであるが、本作品の図は室内に冠直衣姿が二人、女君と女房も一人ずつおり、皆で畳の上に敷いた白い紙の上に置かれた榊の枝を見ている。また野分の巻では、

詞書は童に虫籠を持たせて庭に降りさせるといふ、よく絵画化された箇所であるが、本画帖の絵は室内に虫籠を二つ並べて置き、それを冠直衣の人（野分の見舞いに訪れた夕霧か）・女君（秋好中宮か）・女房・女童・少年の五人が見ている、という物語には書かれていない内容になっている。そのほか須磨の巻の詞書は、須磨にいる光源氏を頭中将が訪れた件だが、絵では室内に烏帽子直衣姿と少年が一人ずつ、屋外に文箱と笠を持ち蓑を着た素足の男性が一人いる。物語では頭中将が須磨を訪ねた折、海士が貝や海藻を持ってきたとあるので、それが文箱に写し崩れたのであろうか。あるいは蓑と笠に注目すると、次の明石の巻の冒頭に紫の上からの使者は「あやしき姿」とあり、その身なりは「此御使也。蓑笠などの躰なるべし」と『湖月抄』所収の『細流抄』が注を付けている。その場合、本作には須磨の図がなく、代わりに明石の図が二枚あることになる。

このほか東屋の巻も場面が確定しにくい。詞書には浮舟の結婚相手には左近少将がふさわしいと判断した母親が、浮舟に返事をさせたと書かれ、絵にも巻紙を両手で広げて見ている浮舟、その母親と三人の女房が描かれている。ただし、この箇所は絵画化された例が見当たらず、また絵になる箇所を集めた『源氏物語絵詞』⁵⁾にも掲載されていない。ただし、浮舟が持つ巻紙には文字ではなく草花のよ

うな図が描かれている。もしそれが絵巻物ならば国宝源氏物語絵巻にも採られた場面、すなわち物語絵に見入る浮舟、浮舟を見つめる異母姉の中の君、物語を朗読する女房などになるが、本画帖には物語の冊子は見当たらない。構図が似た絵を佐野みどり氏編『源氏絵集成』（藝華書院、平成二三年）から探すと、①土佐派源氏物語色紙画帖（出光美術館蔵）の第三六図、②源氏物語色紙貼付屏風（齋宮歴史博物館蔵）、③源氏物語色紙画帖（海の見える杜美術館蔵）、④白描源氏物語団扇貼付屏風（高津古文化会館蔵）がある。いずれも女君が両手で持っている巻物には草花などの絵が描かれ、物語を朗読する女房はいない。また、②の詞書は浮舟が物語を見ている箇所、③の詞書は卷名歌のみで、それは薫が浮舟の隠れ住む三条の家を訪れた際の詠歌である。①～④の解説（『源氏絵集成』所収）によると、いずれも土佐派の影響が指摘され、本画帖も土佐派と推測される。

また、初音の巻の図は元日に光源氏が明石の君を訪れた件で、よく絵にされている。一方、詞書は光源氏が年始回りで末摘花を訪ねた箇所、『源氏物語絵詞』にも採られていない。初音の巻ではめ度たい場面が絵画化されているので、末摘花を取り上げるのは珍しいが、土佐一得筆「源氏物語色紙貼交屏風」（『源氏絵集成』所収）左隻の第三扇の絵と第六扇の詞は本画帖と共通する。

次に詞書を見ると、一例だけ本文が中略されている。それは朝顔の巻で、和歌の直前にある手紙の文章を欠く。その巻も含めいずれの巻もおおむね青表紙本系統と見られるが、明らかに違う本文が数例ある。最も異なるのは総角の巻で、大君が頑なに薫を拒み朝を迎えたとき、薫と大君が交わした贈答歌の間に本先品には、「かゝるためし世に有けむやとの給へは心からにうくそ聞給ふ」の一節が入る。

（薫は和歌を詠み大君に）「かかるためし、世にありけむや」やとのたまへば、（大君は）心からに憂くぞ聞きたまふ。（以下、大君の返歌）

『源氏物語大成 校異篇』の底本は「かゝるためし世にありけむやとの給へは」（二六一九頁4行目）のみで、詞書の「心からにうくそ聞給ふ」がない。河内本系統もその一節を欠くが、青表紙本系統のうち肖柏本（牡丹花肖柏筆本）は「のたまへは心からとなく、そき、給ふ」、別本の平瀬本は「の給へは心からとなく、き、給」で、二本とも詞書の本文に近い。もし詞書の「にうく」が「にく」の誤写ならば、さらに肖柏本に近づく。

そのほか花散里の巻の本文で「聞す」は河内本の「きかす」と同じで、青表紙本の「かきくづす」とは異なる。もう一例示すと、竹河の巻で薫が詠んだ和歌、

てにかくる物にしあらは藤の花まつよりこゆる色をみましやの第四句が「こゆる」であるのは河内本系統で、青表紙本系統は肖柏本が「こゆる」である以外は「まさる」（ただし陽明家本は「まさる」）である。青表紙本系統の中でも肖柏本と次に取り上げる三条西家本は、河内本と共通する本文が散見される。

三、源氏八景絵巻 一巻

本作品は桐の二重箱入りで、外箱にも内箱にも「源氏八景」と直に墨書きされている。内箱の中に極め書きが入れられ、それは縦四五センチ余り、横六三・六センチの檀紙を二つ折りにしたもので、開けると「外題 九條左大臣「尚實公」／菅銘 綾小路中将「俊資朝臣」」は改行、「内」内は傍記を示す）、次いで「源氏八景筆者」と題して、「箒木夜雨 閑院彈正尹宮「美仁親王」／須磨秋月西園寺前内大臣「賞季公」／明石晚鐘 庭田前大納言「重熙卿」／松風婦帆 野宮中納言「定和卿」／朝顔暮書 石井前中納言「行忠卿」／乙女初雁 四辻前大納言「公亨卿」／玉葛晴嵐 油小路大納言「隆前卿」／夕霧夕照 伏見兵部卿宮「邦頼親王」）と墨書されている。傍書された人名は別筆かもしれないが、官職と照合すると以下のようになる。外題を記した九条尚実が左大臣を務めたのは一七五九〜一七七八年の間、箱書きした綾小路俊資が中将に就任したのは

一七七六年である。よって両者の期間が重なるのは、一七七六〜七八年の三年間に限定される。次に源氏八景の執筆者を調べると、野宮定和が中納言に任命されたのは安永六年（一七七七）八月二〇日、石井行忠が亡くなったのは同年一月二九日である。よって本作品の成立時期は、安永六年八月二〇日から一月二九日までの三か月に絞られる。当時の年齢を数えて示すと、九條尚實は六一歳、綾小路俊資と美仁親王は二〇歳、西園寺實季は三五歳、庭田重熙は六一歳、野宮定和は三六歳、石井行忠は六二歳、四辻公亨は五〇歳、油小路隆前は四八歳、邦頼親王は四五歳である。ちなみに最年少である綾小路俊資の美父は、「明石晚鐘」を担当した庭田重熙である。

源氏八景の起源は、中国の伝統的な画題である瀟湘八景に由来する。日本には鎌倉時代から室町時代にかけて瀟湘八景図が伝わり、近江八景や金沢八景などが選ばれた。源氏八景は巻の順に並び替えられているので、瀟湘八景と近江八景を源氏八景の順に示すと、瀟湘夜雨・唐崎夜雨、洞庭秋月・石山秋月、烟寺晚鐘・三井晚鐘、遠浦帰帆・矢橋帰帆、江天暮雪・比良暮雪、平沙落雁・堅田落雁、山市晴嵐・粟津晴嵐、漁村夕照・瀬田夕照となり、「落雁」が源氏八景では「初雁」に変更された以外は一致する。乙女の巻に「初雁」という言葉はないが、「落雁」よりもふさわしいとされたのである^⑥。源氏八景の伝本の多くは詞書のみで絵を伴わないが、本学所蔵

品は絹本の絵巻物である。

本絵巻の表紙は蜀江錦で、「源氏八景」と墨書された題簽が貼られている。見返しは極彩色で金箔や金泥による霞引きが施され、詞書は素檜霞・白緑の雲・金切箔散らしの美料紙、紙背にも一面に金銀箔が押されている。絵もまた天地に金銀雲をあしらった金銀泥彩色画で顔料も上質であり、御用絵師の可能性も考えられる。また軸の端は黒漆塗で、若松の唐草文様が金時絵で裝飾され、極めて豪華に仕立てられている。詞書から安永六年（一七七七）成立と推定されるならば、まさに田沼時代（一七六七〜一七八六年）に制作された名品である。表紙の寸法は縦が三一・八、横が四〇・四センチ、絵の横幅は最終図が一〇〇センチである以外は、いずれも七四センチ強である。詞書の幅は不揃いで、小数点以下を略して第一紙から列挙すると、九七、五七、六四、五四、一〇四、八四、五七、九七センチである。最初と最終の料紙が長いのは筆者が親王であるからだが、最長の紙が最も官位の低い石井前中納言であるのは最年長者だからであろうか。

詞書と絵の内容は、いずれも一致している。第一図「簾木夜雨」は雨夜の品定めが始まる箇所、光源氏宛の手紙を頭中将が見ているところ。雨が細い直線で描かれているのは浮世絵には見られるが、源氏絵には珍しい。第二図は「須磨秋月」に合わせて詞書は一月の

いとかなやかにさしいてたるに」から始まる。物語ではその直前に飛ぶ雁を見て従者たちが和歌を詠む件があり、絵では雁の方がよく選ばれるが、本図では月のみで雁は見られない。これは第六図「乙女初雁」のテーマが雁であるため、重複を避けたのかもしれない。第三図「明石晚鐘」は光源氏が初めて明石の君を訪れた条で、「光起が、男女の出会う直前の景を選んで絵画化した、他に類例のない場面^⑦」とされているが、もし源氏八景が光起の活躍した十七世紀より前に成立していたならば、光起は源氏八景から選んだ可能性も考えられよう。第四図「松風帰帆」も「意外に絵にされていない」（注⑦に同じ）が、これは源氏物語絵は婚禮道具にされたため、明石の入道だけが明石に留まり、上京する家族を見送るといふ別れの場面は避けられたからであろう。第五図「朝顔暮書」は当巻を代表する絵で、大きな雪玉のそばに女童が二、三人、少し離れて小さな雪玉を持つ女童が一人というのが定型である。しかし本作品は大きな雪玉には二人だけで、離れた一人は手ぶらである。また、地面に置かれた扇は詞書の「あふきなどもおとして」に合うし、第六図「乙女初雁」の竹や第八図「夕霧夕照」の竜胆に虫も、本文に合わせて丁寧に描かれている。第七図「玉葛晴嵐」では玉鬘は衣の裾だけで示され、貴人に扱われている。人物の顔の描き方などから推すと、狩野派の作かと考えられる。

詞書の本文は青表紙本系統の三条西家本に近いが、当写本は河内本の本文と一致する部分が散在する。たとえば古来、青表紙本と河内本の相違点として有名な箇所の一つが、第三図の「明石晚鐘」の詞書に見られる。それは明石の入道が娘の住む館の戸口を、青表紙本では「けしきばかり」、河内本では「けしきこと」(河内本)押し開けた、という件である。^⑧ 本作品は「けしきことに」で、その本文は河内本系統のほか青表紙本系統の三本(横山本・陽明家本・三条西家本)にも見られる。「明石晚鐘」のほかの箇所にも、似た現象が指摘できる。詞書には「おもひのこすことはあらしとすらむとおほしやらるゝに」とあり、青表紙本系統の三本(前掲の三本)は同文だが、ほかの青表紙本諸本は傍線部の「すらむと」を欠く。^⑩ そのほか第二図「須磨秋月」では、本作品と三条西家本・河内本系統は「のたまひし」、三条西家本以外の青表紙本系統は「のたまはせし」と分かれる。三条西家本の転写本は宮内庁書陵部に三件もあり、朝廷で重んじられたことが知られる。^⑪ 本絵巻は堂上における源氏物語本文の享受という点においても、重要な作品であるといえよう。

注

① 源氏物語の本文は延宝三年(一六七五)に刊行され流布した『湖月抄』(同志社大学所蔵の版本)による。

② 本学所蔵の別の源氏物語画帖においても葦は簀子に立っているが、扇は手にしていないし、また両手を広げていない。その画帖に関しては、小稿「源氏物語画帖『源氏御手かゝみ』(同志社大学所蔵)の紹介」(『同志社国文学』第八一号、平成二十六年一月)で紹介した。

③ 近年、青表紙本について論議されているが、本稿では『源氏物語大成校異篇』に取められた諸本を指すことにする。

④ 本居宣長も『紫文要領』において、「たしかに河内本見たる人もなし」と記している。

⑤ 片桐洋一氏・大阪女子大学物語研究会編著『源氏物語絵詞——翻刻と解説——』、大学堂書店、昭和五八年。

⑥ 宮川葉子氏は、「夕霧と雲井雁の幼恋は落雁ではなく初雁であると判断した結果であろう。」と推定された(『源氏八景』について——長野善光寺本を中心に——)、同氏『源氏物語の文化史的研究』所収、風間書房、平成九年。同氏「源氏八景帖」、『善光寺本坊 大勧進寶物集』所収、平成十一年、郷土出版社)。

⑦ 『豪華源氏物語』(学研、昭和六三年)、田口榮一氏氏の解説。

⑧ 現在は日本大学所蔵で、『日本大学蔵 源氏物語』(八木書店、平成六〇八年)の影印による。なお、書陵部にも三条西家旧蔵本があり新典社から影印も刊行されているが、日本大学本とは本文を異にする。

⑨ 今川了俊が師の冷泉為秀の説に私見を加えて著わした『師説自見集』には、「けしきはかり」の一節は「源氏一の詞なりとそ定家卿は申され」、「けしきこと」の本文では「よ情のはるかにおとりて」と評している。詳しくは小著『源氏物語古注釈の研究』(和泉書院、平成十一年)参照。

⑩ ちなみに河内本は「あらしとおほしやらるゝに」の箇所が、「あらしかすとすむ覧人の心おもひやるに」である。源氏八景の伝本の中には、その河内本の本文を有するものもある(国文学研究資料館所蔵『夜の

燈』所収本など)。

⑪ たとえば一八世紀に活躍した冷泉為村も、その透写本を所持していた。

詳細は「源氏物語 柏木」の解題「岩坪担当」参照(『冷泉家時雨亭叢書』第九九卷、朝日新聞出版、平成二十七年六月)。

〔付記〕 美術面の考察においては、両宮六途子氏のご指導を仰ぎました。

末筆ながら、ご芳名を挙げて深謝いたします。